



土岐市
TEL
FAX
メールアドレス
所発行責任者
発行日
題字

教育研究所
0572-54-1111 (内281)
0572-55-6310
kyouiku@city.toki.lg.jp
No.535
所長 橋本 勇治
平成29年 9月 8日
山田 恭正 教育長



『円を正多角形とみて、面積を求め、円の公式を作ろう。』
六年一組 伊藤 康代 学級
算数研究授業

撮影者 駄知小学校
山田 鏡一 先生



心が何となく「ホカホカ」する教室

土岐市教育研究所長 橋本 勇治

授業参観におじゃました教室で、先生が縦列ごとにプリントを配られる場面にでくわします。緊張していらっしゃるのか、普段からそうなのか、先日訪問した小学校の某先生は、先頭の子供に手渡すべき枚数が、ほとんどの列で間違っていました。

私の目の前のAさんは、プリントが手渡されると同時に、「ありがとうございます」と先生にお礼の言葉を述べていました。はっきりとした声で、板に付いた応対だな、と感心しましたが、それだけなら、最近よく見る光景です。Aさんはプリントを受け取るやいなや、枚数を数え始めました。そして、「先生、1枚余分です。」と余ったプリントを片方の手で先生に差し出しながら、もう一方の手で後ろの友達にプリントを回し始めます。その手際の良さ、流れるような動きに感心しきりでした。

中央の列では、素早くプリントがパスされていきました。それぞれが手渡すときに、「どうぞ」と「ありがとう」の声を交互に掛け合っていきます。ところが、最後尾の一人前のところで、プリントが1枚足りないことに気付きます。それに気付いたBさんは、自分の分をキープせず、何食わぬ顔で最後尾の友達に「どうぞ」と最後のプリントを渡しました。最後尾の友達の「ありがとう」の声を聞きながらゆっくりと立ち上がったBさんは、

足りない1枚を自ら取りに教卓に歩み寄ったのでした。

窓際の列には、途中で欠席者の席があります。前席のCさんは、後ろを振り向いて立ち上がり、プリントを丁寧に欠席者の机の中にしまい込み、さらにもう1枚をその次の席のDさんに手渡しました。プリントのリレーが終わったところで、おもむろに立ち上がったDさんは、先ほどCさんが欠席者の机の中に入れたプリントを再び取り出し、名前を記入しています。もちろん、その欠席している子の名前です。そして、机の中にたまっているプリント類をきれいにそろえて、丁寧に元に戻すのでした。

恥ずかしながら、私が担任した教室では、欠席している子の机の上にプリントが乱雑に放置されたり、ひどいときは荷物置き場に利用されたりしていることもありました。グループ隊形にしようとして指示しても、どうしても机をびったりと寄せきれず、微妙な隙間が空いたり、机があっちこちを向いたり、殺伐とした状況にもがき苦しんだこともありました。

昔のことをちょっぴり思い出しながら、「どうしたらこんなホカホカした教室になるのだろう」と自問していました。他意も、打算も全くない、素直で自然な子供たちの姿に、心が何となくあたたかくなるのを感じながら。

背中を押す力、一步踏み出す力

土岐市教育委員長 加藤 悟

「迷ったらより積極的な道を選ぼうよ。」
「考えてばかりいると日がくれちゃうよ。」
「好奇心が新しい道を教えてくれる。」
「道は百も千も万もある。」
「どっちが正しいかでなくどっちが楽しいかだ。」
岐路を前に自らの進路を決められず、一步踏み出すことを躊躇する人の背中を押す言葉です。

色々ありますがどれが響くかはそれぞれです。

不遜ではありますが、こんなとき私は1冊の本を贈ってきました。転職を考えていたかつての職場の同期社員、会社を辞めて大学に戻った後輩、結婚前の現在の妻、自身一度しか読んだことはないのに、何冊も買って贈った本、それはミヒヤエル・エンデ「はてしない物語」です。

常に読み返してもいないし、実はどんな物語であったのかもよく覚えていないので、座右の書と言えるのかわかりませんが、30歳を前にこれを読んだとき、大変な衝撃を受け、「これだ！」と一挙に悟りが開けたように感じられたほどで、私を転職へと導き、背中を押してくれた本です。

本稿に臨むにあたって本来読み返し、確認するところでしょうが、自身の生き方に今でも少なからず影響している解釈が変わってしまうのが怖いのであえてしていません。ご了承ください。

この本に何回も出てくる「けれどもこれは別の物語、いつかまた、別のときにはなすことにしよう。」というフレーズがあります。

誤った解釈、思い込みなのかもしれませんが、自分の人生＝物語は自分の選んできたものだけなのだけど、別の方へいったとしても別の人生＝物語が同じように続いていくのであって、どれも間違いではないといっているのだと思っています。

人生には大小様々な岐路があり、ひとつひとつの岐路で選択肢の数だけの物語が生まれます。

その中でひとつしか選ぶことができない選択をし、選んだ道を歩きはじめたとき、そこには、その道を選ばなかったら決して見ることもない景色があり、その道ならでの気づきや経験値の蓄積がなされるのです。言い換えれば、すべての選択肢が正しい、間違いではないということです。

時に、ああ別の選択肢を選べばよかったと思うことがあるかもしれません。しかし、実際その選択肢を選んでいたら、どうだったのでしょうか。「その選択肢を選べば良かった」と考えるに至る経験をした自分はいないわけです。

そう考えてみると改めて、すべての選択肢が決して間違いではないとわかります。

私自身、仮に転職をしなかったとしたら、今とは別の経験値、別の思想・感性・考え方、別の家族・知人・友人、そして別の長所・短所を持った全く別の物語を生きる私がここにいたのでしょうか。

その人生が、とんでもなく素晴らしいものであったのか、またひどいものであったのかわかりませんが、それはどうでもいいことです。つまり「これは別の物語、いつかまた、別のときにはなすことにしよう。」ということで、私の人生、私の物語ではないのです。

映画「バックトゥザフューチャー」シリーズの何作目かで、過去に行き、従来と異なる行動（落とし物？）をしたことにより、戻ってきた現代が全く別の世界となっていたことがありました。

未来はちょっとしたはずみでどんどん変わるもので、樹形図にすると無限に広がっていきます。

大切なのは、小さな岐路で、何かをやった人生、やらなかった人生、回数を重ねると、造りあげられる自分の姿は随分違ったものとなることに気づくことです。

なりたい自分の姿は、いくつもの選択を繰り返し、少しずつ自分が造り上げられると変わってくるものです。

そして、全ての選択肢が正解となれば、もはや、怖いものなし、躊躇は不要です。なりたい自分に向かって、常になりたい自分の姿を意識して、「自らの個性を發揮し、自信をもって未来を切り開く選択」をしていこうではありませんか。

こんな寄稿ができるのも、我が家のテレビに1時間百円のコインタイマーを付けられたのも、修学旅行に行く子供をインター手前で横断幕を揚げて送ってやれたのも、そんな力によるものなので、

土岐市立妻木小学校附属幼稚園「研究の構想」

研究主題 夢中になって遊ぶ子をめざして
～かかわりを広げるための環境と援助～

【主題に向けて】

私たちは、幼稚園教育において、子ども達がモノや人などの環境とのかかわりの中で『心豊かな子』に育ってほしいと願っている。子ども達は幼稚園を安心できる場と感ずること、 “やってみよう” “やってみたらできた” “楽しかった” という思いをもち、自分の世界を膨らませていく。そのためには、自己を発揮して遊ぶ中で、満足感を味わうことが大切と考える。次第に周りにも目を向け、人とのかかわりの中で様々な感情を体験しながら、かかわる心地よさを感じていくと思う。

【願う子どもの姿】

- 3歳児 安定した生活の中で友達とかかわりをもち、楽しく遊ぶ子
- 4歳児 友達の思いに気付きながら様々な活動に楽しんで取り組む子
- 5歳児 友達と思いや考えを伝えたり受け入れたりして同じ目的に向けて取り組む子

【研究仮説】

保育日誌や教師間の話し合いの場をもち、かかわりの広がりやめやす表を活用した幼児理解を深め、意図的・計画的ななかよし遊び・クラス活動の環境を整え、かかわりを広げる援助を考えていけば、子ども達がかかわりを広げるようになり、夢中になって遊ぶ子に近づくと考える。

【研究内容】

1. 遊びや生活の中から子どもの思いや考えを捉えた幼児理解
2. 友達とかかわって遊べる意図的・計画的な環境構成
3. かかわりを広げる指導と援助

【夢中になって遊ぶ姿の捉え】

人間形成の基礎を培うために

- ・進んでやってみようとする。(主体性)
- ・やりたいことがある。(自己決定)
- ・繰り返し行う。(意欲)
- ・もっと遊びたいと思う。(意欲)
- ・工夫したりもっとこうしたいと思ったりする。(目的意識)

友達とのかかわりの中で

- ・友達の遊びに魅力を感じる。(憧れ)
- ・友達のよさに気付き認める。(承認)
- ・友達と一緒に遊ぶ嬉しさを感じる。(共感)
- ・考えを出し合ったり力を合わせたりする。(協力)

幼稚園では幼児の発達段階から“遊び”という直接的・具体的な体験をしています。遊ぶことの中には学びにつながっていくことが多く含まれています。また、挨拶をする、話す・聞くこと、身の周りの始末などの基本的な生活習慣の指導やクラスで目的をもって進めていく活動も合わせて行っています。幼稚園教育要領が改訂され、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿も打ち出されました。お互いの教育を理解し合いながら学校との連携、学びのつながりを深めていきたいと思ひます。

仲間とともに よりよい自分を求め続ける子

土岐市立肥田小学校

I はじめに

本校は、「平成28・29年度 東濃地区教育推進協議会指定学級経営」「平成28・29年度 土岐市教育委員会」の指定を受け、今年度、2年目の取組となった。昨年度は、算数科の授業改善を中心としたよりよい人間関係づくりを窓として研究を進めてきた。今年度は、さらによりよい人間関係づくり（学級経営）に重点を置き、算数科と特別活動を切り口として、研究テーマを具現する姿を目指し、研究を進めている。また、本校では、「①仲よく安心できる学級づくり（＝よりよい人間関係づくり）」と「②楽しくわかる授業づくり」のこの二つを重点とすることで、「学校生活が楽しい」と感じる児童が増えると考えている。さらによりよい人間関係づくりを目指し、仲間と学び合いながら、自ら理解を深めていくとする授業の充実を図っていくこととした。仲間との学び合いを重点に授業の質を高めていくことが、学びの充実感や達成感、学級への所属感の高まりにつながり、学校生活が楽しいと感じる児童が増えると考えている。



指導の方法	教師の言葉
①話し手の方を向く。	①話す子の方を向きましょう。（全員が話す児童の方を向くまで話さないようにする。）
②話し手の目を見る。	②話す子の目を見て話しましょう。（教師は、話す児童の位置に立ち、目を見て聴いているか確認する。）
③最後まで黙って聴く。	③最後まで黙って聴きましょう。（口をはきむ子がいたら、もう一度やり直させる。また、教師は、児童と同じ目線で発言を聴きとる。）

＜図1 話す人の目を見て黙って最後まで聴く指導表（一部抜粋）＞

【研究方法2-②】

自己有用感をもったり、共感的に学んだりするための指導・援助を行う。

自分や仲間の多様な考えのよさに気付いたり、仲間の考えを自分の考えに取り入れたりしていくことは、集団への帰属意識や所属感を持ち、よりよい人間関係の形成につながると考える。そこで、自分の考えを表出する小集団活動を位置けるようにした。

実践例 算数科 1年生 「いくつといくつ」

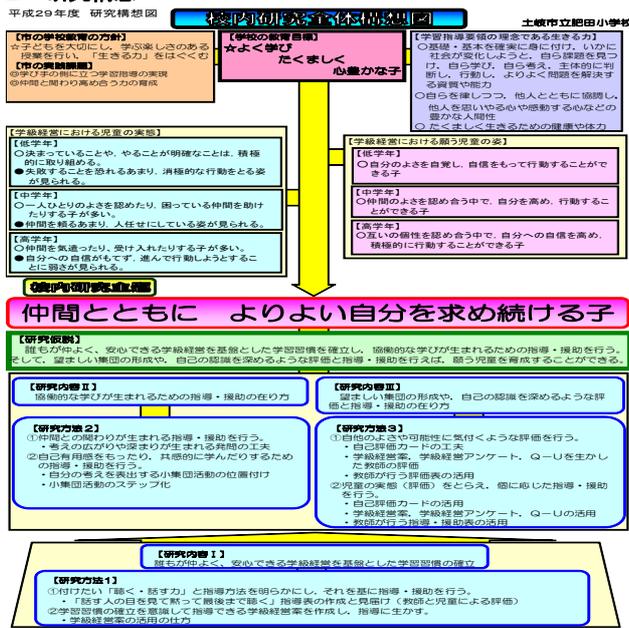
協働的に学び合って、本時のねらいに迫るために、ペア活動を仕組んだが、同時にこの頃の児童は入学して間もない5月であったため、ペア活動における学級目標の「なかよし」の具体的な姿を目指し、仲間との学び方を身に付けさせていくことも大切にしたい。そこで、以下の「なかよし」になるための4つのルールを児童に伝えてから、ペア活動を行うようにした。このペア活動を仕組んだことにより、教え合いが生まれ、仲間と関わり合いながら数がいっしょといくつで構成されるか見付け出すことができた。本校では、こうした小集団活動を授業のねらいや内容に応じて、意図的に位置付けている。



【学級目標「なかよし」を具現したペア活動のルール】

- ①あいさつ「おねがいます。」（握手）
- ②ルール決め（順番を決める）
- ③みつめたことを書く。
- ④あいさつ「ありがとうございました。」（握手）

II 研究構想



II 研究方法と研究の実際

本年度、取り組んでいる主な研究実践を紹介する。

【研究方法1-①】

付けたい「聴く・話す力」と指導方法を明らかにし、それを基に指導・援助を行う。

昨年度は、「聴く・話す力に関する指導表」を作成し、①話す人の目を見て、黙って最後まで聴くこと、②結論に根拠をつけて話すこと（「～です。（わけは）～だからです。」）を柱として、実践してきた。それは、話す人の目を見て黙って最後まで聴くということは、相手を大事にしている、信じているという心と心をつなぐ一番大切な思いやる姿であると考えているからである。さらに、今年度は、「話す人の目を見て黙って最後まで聴く」指導に重点を置き、その指導表（図1）を基に、学校の全教育活動を通じて、教師は指導している。また、児童が、話す人の目を見て、黙って最後まで聴くことを児童がより意識することができるように、学習見届け週間を行っている。

【研究方法3-①】

児童の実態（評価）をとらえ、個に応じた指導・援助を行う。

自己の認識を深め、自分への自信を高めたり、他者理解を深めたりしていくことができるように、昨年度、教師が児童の実態（評価）を的確にとらえ、個に応じた指導・援助を行ってきた。今年度は、昨年度の実践を「児童の実態（評価）」をとらえ、個に応じた指導・援助」として表にまとめ、日常の授業の指導に活用している。（図2）

児童のよさや可能性を自覚できる評価	他（児童の存在）を全体に広める評価
①〇〇さん、じっくり取り組めたね。がんばりが素敵だよ。 【関心・意欲・態度面から】	①〇〇さんは、話をこちらに向けて、話を聴く用意ができていたね。
②〇〇さん、よい姿勢だね。～のよさがあるよ。 【学習習慣の確立の面から】	②〇〇さんは、よい姿勢で取り組んでいるね。～のよさがあるね。（どうして、いいのか分かるかな。）
③〇〇さんの聴く姿勢がいいね。～のよさがあるよ。 【学習習慣の確立の面から】	③〇〇さんは、相手の目を見て聴いているね。～のよさがあるね。（どうして、いいのか分かるかな。）

＜図2 自他のよさや可能性に気付くような評価（一部抜粋）＞

III 終わりに

本年度、平成29年11月2日（木）、研究発表を開催します。本校の取組をご覧いただき、忌憚のないご意見をいただきたいと思ひます。

第2回 学力向上推進委員会報告 「実効性のある指導改善プランについて」

～岐阜大学教育学部 学習協創開発研究センター長 益子典史 教授 「学力の捉え方」より～

学力向上企画委員 泉小学校 板倉 みゆき

1 学力調査から授業のあり方を考える

《PISA2000年調査国際結果報告書より》

▲大陸の面積に関する問題において、日本の生徒の無答率（50%以上）は大変高い。

⇒ 間違っている自分の意見を表出する場面を設定する。

《平成20年4月実施 第2回全国学力・学習状況調査より》

▲他人の考えを取り入れて答える問題において、岐阜県の生徒の正答率は低い。

⇒ 理解したことを第三者に分かるように説明する場面を設定する。

《課題として》

- ☆教師が「指導している」（と考えている）内容が、児童生徒の学力に反映していない!
- ☆「思考・判断・表現」を育てる活動を十分に確保する!（「理解」だけでは不十分である。）
 - ・不十分な説明の価値を認める。 ⇒ 児童生徒の意見を表出させる。
 - ・友だちの判断の根拠を考え、説明する。 ⇒ 説明が不足していたら補い、修正する。
- ☆国語・算数（数学）の授業だけでなく、全ての教科で!

2 「学力の3要素」とは何か?

・「確かな学力」とは ①「知識・技能」⇒ これが重要なのは当然!

②「思考力・判断力・表現力」

③「主体的な学習態度」

これらをいかに育て、評価するか!

学習指導要領改訂のポイント

・「何ができるようになるか」を明確化

知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、

①「知識及び技能」

②「思考力、判断力・表現力等」

③「学びに向かう力、人間性等」

②③を1時間単位で評価することは不可能。連続的にどう伸ばすかという視点を持ち、長期に渡って刺激を与え続けることが大切!

の三つの柱で再整理。

3 学校の現状の読み解き方と指導改善プランのあり方

・質問項目を2つに分けて考える。

①教師の意図で向上する項目（活動の頻度⇒変えやすい項目）

例）・授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていたと思う。

・家で、学校の宿題をしている。

⇒「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」児童の変容をねらう。

②児童生徒の認識変容で向上する項目（自分にとっての意味⇒変えにくい項目）

例）・学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができている。

・自分で計画を立てて、家で勉強している。

⇒今、学んでいることを意識させ、自分が何を伸ばしているのか分かることが大切!

・平成29年1月の調査を受け、平成30年1月に、児童生徒をどのような状態にしたいかを考える。

－学習状況のどの項目をどのように変容させるか。

－その変容のために、学校で何に取り組むか。

－8月末の全国学力・学習状況調査の結果をどう活かすか。

全職員で共通認識し、
長期的にみていく!

「私の教育実践」

心を掴む保健指導

下石小学校 養護教諭 楓 久代

「先生、今月は何の話をしてくれるの？」

2ヶ月に一度の体重測定の際に保健室に入ってきた児童が、私の顔を見た瞬間に言ってくれた言葉です。保健指導はたった10分ほどの時間ですが、私には勝負の時間です。保健関係の情報発信は、保健日より、掲示物、保健委員会による働きかけなど様々な方法がありますが、保健指導の時間は私の言葉で児童一人一人の顔を見ながら「健康教育」ができる数少ない機会だからです。

昨年度、土岐市養護教諭部会の小学校グループは、「朝食」「睡眠」「ゲーム」の3つのテーマで指導案と資料を作成し、この教材を使って指導を行いました。他校の養護教諭の先生方と実践交流すると「こんなにも児童の捉え方が違うんだ!」「こんな話し方をすると面白いな!」と私自身の話し

方にもっと工夫が必要だと気付きました。体を使った表現、教材の使い方、発問の仕方など、まだまだ課題も多いですが、児童の反応や表情をじっくり見ながら試行錯誤しているところです。

今年度は、ステップアップを目指してもう一つ心がけていることがあります。それは、教材作りの工夫です。教材の中に少しユーモアを加えて、ちょっとだけ面白い教材を作るようにしています。今後はICTを活用した分かりやすい保健指導にも挑戦してみたいと考えています。

初めての小学校勤務を経験して、1年生～6年生の発達の幅広さと発達段階に合った指導の難しさを実感しています。「何を伝えるか」を明確にし、児童の心を掴む保健指導ができる養護教諭を目指していきたいです。

「私の教育実践」

「分かった」「できた」を実感できる授業を目指して

駄知中学校 教諭 虎山 泰昌

「分かった」「できた」という実感を生徒がもてる授業。今、私が実践しようとしていることなのです。

生徒たちは「勉強が嫌い。」と言いますが、本当は分かるようになりたい、できるようになりたいと願っています。授業を通して、「分かった」

「できた」と実感することができれば、生徒たちの学習に対する意識も変わるのではないかと考えました。

数学は、すでに明らかになったことを用いて新しい仕組みを明らかにしていく中で、論理的な思考を育む教科です。そこで、授業開始前の学習では、生徒の実態に応じて、関連する既習内容を意図的に振り返ったり、考えづくりの補助として黒板に提示したりしていくことにしました。

そして、終末の評価活動では、どのように「分かる」ようになったのかを自分の言葉で振り返ると共に、「できる」ようになったのかどうかを、問題を通して確かめるようにしました。

これらの実践を通して、既習内容の何を使うかが想起しやすくなり、新しい問題に出会った時にも何が使えるかと、意欲的に考えることができました。また、終末の評価活動によって、基礎的・基本的な知識や技能を身に付けることができました。

今後は、「どこまでを指導援助していくのか」、「何を振り返るとよいか」、「評価問題はどうか」をさらに研究していきたいと考えています。

「子どもたちを信じましょう！」

駄知小学校 校長 杉浦 正佳

目を引くような真新しい言葉ではありません。教育に身を置く私たちの周りでは、当たり前の言葉です。

本欄の執筆は2回目です。前回（H23年度）は、土岐市駅から班毎に出発し、古都京都を巡り宿泊先のホテルに集合という修学旅行に関わる言葉について述べました。

本稿では、その時に心にひびいたもう一つの言葉として、タイトルの言葉を紹介します。

当時の生徒の様子とは言えば、他学年と比較すれば落ち着いている感がありました。しかし、指導が難しくなる年齢でもあり、安心感をもって生徒を見られる状態ではありませんでした。

その様な中での現地集合という修学旅行の実施でした。勿論、生徒も修学旅行を成功させるため

に、他校の掃除見学を行って自分達の掃除の見直しをしたり合唱を高めたりするなど、生活の質を向上させて、学年集団の力をつけていきました。

そして、実施にあたっては、最後に大きなハードルがありました。保護者の理解でした。

日頃は教員が話すことの多い学年懇談会が、保護者の声で埋まるものになりました。

「名古屋駅で東京方面に乗ってしまったら…」
「班がバラバラになってしまったら…」 等々
そのような声が多数占める中、ある保護者が、「(子どもから修学旅行に向けて頑張ってきていることを聞いています。私たちこそが、) 子どもたちを信じましょう。」と毅然と発言されました。

現地集合の修学旅行に流れが変わりました。今でも鮮明に残る修学旅行となりました。

新しいALTを紹介します



9月から土岐市内の幼稚園、小・中学校でALTとして英語の指導をしていただくマックファーソン・イザベル・ルースさん（23歳）です。英語教育を充実させるため、ALTが3人体制になります。

〈担当する学校・園〉

西陵中、駄知中、下石小、妻木小、駄知小、下石幼稚園
妻木幼稚園、駄知幼稚園、浅野教室

Hi! My name is Isabel. I'm from California in the USA. I enjoy listening to music and studying Japanese. I am excited to meet everyone and have fun in English class.